学生・社会人・教員でつくる自主学習会

「学びのコミュニティ活動」から見える生涯学習の形

光永雅子
(徳島大学大学院生)

【要旨】
徳島大学では、平成20年度より『地域社会人ボランティアを活用した教養教育』に関する様々な取組を実施してきた。学生・社会人・教員という世代や立場の違う三者が同じテーブルにつきテーマを共有することによって、多様な視点の存在や学びの姿勢に気付き、相互的なコミュニティとしての学びを深めながら、さらに地域と大学との間においても知の循環を生み出すことを目指している。昨年度には授業に参加した地域社会人を中心として、いくつかの自主的な「学びのコミュニティ活動」も始まった。この活動を共有する中で、世代差や経験の相違があるからこそ生まれる新鮮な発見や新たな視点を得て「人は人から学ぶ」という「学びの原点」を体験することに繋がると考えられる。このような自主学習会から、大学を学びの拠点として地域社会に広がる知の循環型社会へと発展することが期待される。

1. はじめに

徳島大学では、昭和61年に常三島キャンパス（徳島市南常三島）内において「大学開放実践センター」を設立し、広く地域に開かれた学習の場として多彩なジャンルの学びを提供してきた。講座は徳島大学の教員をはじめ、地域社会で様々な教育に貢献されてきた方々も講師として携わっており、また経験の長い受講生が一部の講座を補助する形で関わる講座も開講されている。同センターではこれまでに約1600講座を開講し、2万5千人を越える社会人が受講しており、地域社会と共に歩んでいることがうかがえる[1)]。

このように、地域の社会人が公開講座の授業や課外の自主活動において自由に学ぶ姿を見かけることができる環境ではあるが、一般の学生と交流する機会は少なく、世代を越えて学び合うことのできる授業の開講やプログラムの提供を望む声が、公開講座の受講生を中心に広がってきた。

そこで、今回の取組では地域の社会人が一般の学生と同じテーブルについてお互いに学び合う形式の学習プログラム『地域社会人を活用した教養教育～地域に広がる知の循環型社会の構築を目指して～』を作成した。これは平成20年度に文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」に採択された。このプログラムは正規の教養教育の授業と課外の自主学習会において地域の社会人が学生、教員と学び合うことを骨子としている[2)]。今回の報告では昨年度までに実施した様々な取組の中で、特に課外活動として地域社会人が主体となって実施された自主学習会活動「学びのコミュニティ活動」を紹介する。

2. 大学での学びとは

本プログラムでは、これまでの大学の授業の多くの場合に見られる、教員と学生という二者の関係による一方向型の学びから、学生・社会人・教員という三者による、循環型の学びへとそのスタイルを変化させることで、教室に居ながら、感性→実践→理論という、時間と空間を越えた学びの原点を体感し、本当の教養とは何か、生涯学習とは何かを探求しそれぞれが自らの価値観を見つめ、思考の原点を構築してくことを目指すプログラムである。経験も価値観も違う、様々な立場の人間が一つの空間に集まり、共に同じテーマを考え話し合うことは刺激的であり、お互いに多くのことを学び合うことができると期待されるが、時に行き違いや誤解を生む。そこで、このプログラムに参画する地域社会人を大学教育ボランティアと位置付け、授業に先立って教員と共にこの新しい教育プログラムについて考える場を事前学習会として設定した。この会において「学びの原点」の意味を教員と共に考え直し、新しい学びのスタイルを構築することを共通の目的として取組を進めてきた。

本来学びの発端は「興味」であろう。つまりある対象に対するひらめきであり、問いかけとも言える。感性が刺激されることによって、次の段階である実践への動機づけが始まり、さらに繰り返し行われる実践によって、感性はさらに磨かれ新しい視点やひらめきが生まれる。この過程を経ることで、やがて学習者自身の“個性”が明確に誕生する。最初は先駆者の模倣であったとしても、繰り返し実践することで育まれた新しい視点やひらめきが織り込められることにより、個性を持った理論へと進化していく。この理論に基づいて他者と共に実践することにより、学習者個人の経験から発展して、他者と共有しながら考えることを通じて、より普遍性の高い理論へ発展することが期待される。大学での学びは、これまで積み重ねてきた学問体系を基にして自らの経験を通じて疑問を導き出し、個性を持った理論を構築していくという面がある。しかし、これまで設問に対して唯一の解を導き出す方法論を学ぶことに多くの時間を割いてきた学生にとって、既存の知識に対する疑問を出すことは難しい課題であり、自らの感性に基づいて疑問を探すための方法論の探索から始めなくてはならない場合が多い。そこに大学教育への理解が十分になされない原因があるようにも思われる。本来は教養教育として、学びの原理を体得した上で専門教育へと発展していくことが大学での学びの在り方であろう。

3. 学びのコミュニティ

教養教育のひとつの課題として、大学での学びがこれまでとは異なるという気づきを起こさせることが重要であると考えられる。これまでの伝統的な地域社会のコミュニティにおいては「人は人から学ぶ」という学習環境があり、世代や立場が異なる人から学ぶことにより次世代の人材育成が行われてきた。また地域の年長者にとっては、次世代の人材育成に関わり続けることにより、自らの学びの機会を持ち続ける場としての機会もあった。しかしながら近年の日本では、少子高齢化、核家族化などにより地域社会のコミュニティが希薄化して、人と人との関わり合いにより学ぶという学習環境が失われつつある。今回の取組は、大学の授業や課外活動において、地域社会人、教員、学生が「人は人から学ぶ」という学習環境である「学びのコミュニティ」を形成することを目指した。この「学びのコミュニティ」の中で、様々なテーマについて議論することにより「学びの原点」に気付

き、自らの学びに対する興味を、お互いに刺激し合いながら発展させている例も見られた。このように発展の兆しの見えるテーマについての授業や課外活動を独立させ、意欲を持って取り組む柔軟な個性を持つ地域社会人を公募して、新たな「学びのコミュニティ」を形成することで、人からの学びに多様性を生み出すことを試みた。初年度は、三者の関係にそれぞれが慣れること、教員や社会人が自身の役割について立ち位置を掴むことが主な成果となった。2 年目の昨年度には、地域社会人自身の役割を自らが位置づけることができるようになり、授業での三者の学び合いの兆しが見られた。そこで、さらにこの学び合いの息吹を新しい風として発信していくために、授業だけでなく課外活動としての「学びのコミュニティ」を形成して、自主活動として取組を広げることを試みた。この「学びのコミュニティ」自主活動では、本取組を正規の授業で体験した学生や社会人、教員がさらに自由なテーマで学びの発想を提案、具現化することにより、主体的な学びがさらに他の学生へ波及していくことを期待している。つまり、人からの学びを体験した各人が、それぞれの学びを発見し、さらに他に向けて発信してくことが「学びのコミュニティ」活動の目指すところである。

4. 取組紹介

このような目的で立ち上げられた「学びのコミュニティ」において実際にどのような自主活動が行われているかを紹介する。

4.1 学生主催による自主学習会

『恋のうた学習会』(第 1 写真～第 4 写真)
日時：毎週金曜日 15:00～16:30（2009 年 11 月 20 日より）
参加人数（第 9 回まで）：学生 14 名、社会人 44 名、教員 13 名（延べ人数）

本取組の初年度から社会人を交えた様々な活動に参加していた学生が万葉集の中の『恋のうた』に興味を持ったことがきっかけとなり、社会人と学生の自主学習会として開催されている。毎回万葉集の中から『恋のうた』を 3 句ずつ学生自身が選出したものを、社会人と教員を交えて自由に意見交換しながら堪能するという学習会である(第 1 表)。この学習会は昨年度から始まり、3 月までに 9 回を数え、本年度も継続している。参加延べ人数は学生が 14 名、社会人が 44 名、教員が 13 名である。主催者の学生は「古典や歴史などが専門分野ではないが、それゆえに自由な発想で和歌を選出し、社会人や教員とのやり取りの中で、時空を越えて受け継がれてきた人の想いに新たな視点を得た」と活動の成果を総括している。第 1 回、第 4 回、第 9 回の参加者合わせて 31 名（学生 8 名、社会人 16 名、教員 7 名）に対して自由記述式のアンケートを実施した。(第 2 表)

第 1 表：各回で取り上げた和歌と参加人数

回	実施日	和歌(三首の中の一句を紹介)	学生(人)	社会人(人)	教員(人)
1	11/20	秋されば雁飛び越ゆる竜田山	4	5	5

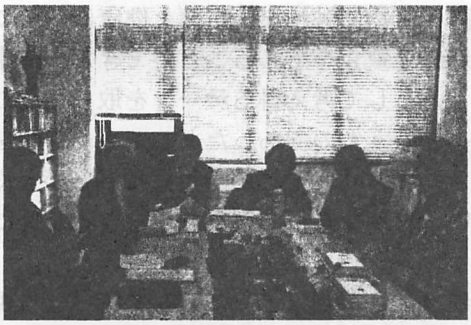
		立ちても居ても君をしぞ思ふ			
2	11/27	我が背子に我が恋ふらくは夏草の 刈りそくれども生ひ及くごとし	1	1	1
3	12/4	あしひきの山より出づる月待つと 人には言ひて妹待つ我を	1	5	1
4	12/18	君が行く道の長路を織り畳ね 焼き亡ぼさむ天の火もがも	3	6	1
5	1/22	忘るやと物語して心遣り 過ぐせど過ぎずなお恋ひにけり	1	5	1
6	2/12	かくばかり恋ひむものそと知らませば 遠く見べくありけるものを	1	5	1
7	2/19	白たへの袖の別れは惜しけれど 思い乱れて許つるかも	1	5	1
8	2/26	うつつには逢ふよしもなし夢にだに 間なく見え君恋ひに死ぬべし	1	5	1
9	3/19	古にありけむ人も我がごとか 妹に恋ひつつ寝ねかてずけむ	1	7	1

第２表：参加者の声

参加者	参加者の声
社会人	・久しぶりに自分の心のひだを眺める機会を与えていただいた。 ・以前から万葉集に興味はあったが、一人で勉強するには限界がある。みなさんと一緒に学べるのが非常に楽しい。 ・参加してみて、もっと勉強したい気持ちになった。他の人の意見を聞くだけでも非常に勉強になった。 ・毎回の歌の選択が非常に素晴らしい。 ・万葉集の奥深さや、変わらない人の感情にについて、よく学ばせてもらえた。
学生	・人生経験を積んだ社会人の方の意見を聞けることは貴重。 ・自分が思っていたよりかなり奥が深く、新しい視点が持てた。 ・年齢差のある方たちと同じテーマで話し合うことの楽しさを知った。
教員	・歌の背景にまで踏み込んだ議論は非常に興味深い ・社会人の方がリラックスした学習会の雰囲気作りに貢献しているのがうかがえる。 ・自分の専門でありながら、また新しい視点や疑問を持つことができた。 ・それぞれが意見を述べることで、改めて歌の奥深さと解釈の相違に気づくことができた。

このアンケートによって得られた回答からは、特に参加している社会人の興味深い心情

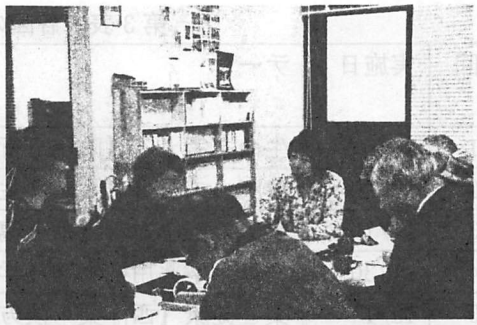
がうかがえる。この学習会に参加している社会人は大学開放実践センターなどでも様々な講座を履修しており、学習意欲の高さが特徴的である。しかし、ほとんどが同世代同士での学びの場となっている空間から、世代を越えて共通のテーマについて意見を述べ合いながら学び合う形式の学習の場に参加することで、自分を見つめ直したり、生きがいにもつながるような意欲を感じていることがうかがえる。



第1写真：第1回ガイダンスの様子

第2写真：テーマの歌を詠み合う参加者

第3写真：意見を述べ合いながら理解を深めていく



第4写真：学生の意見に耳を傾ける社会人

4.2 社会人、教員主催の自主学習会

『実用健康学～手当てとそのこころ～』(2009年10月6日～2010年1月28日)(第5写真～第8写真)

日時：火曜日 9:00～10:10

参加人数：学生70名、社会人40名、教員23名（延べ人数）

上記と同じく、初年度から本取組に参加していた社会人が中心となり、教員と共に学習会を開いた。元鍼灸師と元薬剤師という職歴の方で、長く人の健康や命を見つめ向き合ってきた経験をもとに、世代の異なる学生と健康について語り合うことで現代における健康とは何かを模索してみようと試みたものである。主に東洋思想の視点から健康に関するテーマで全10回が実施され(第3表)、教員はコーディネーター役として参画した。毎回テー

マに沿って参加者同士が自由に意見交換することで、世代の差があるからこそ可能な経験に基づいた知識の伝達が行われた[3)]。また異なった視点から新鮮な解釈や発想が生まれ、世代間交流からの「学びのコミュニティ」が形成され、本当の健康とは何かということを考える有意義な学びの場となった。

この学習会はまず東洋思想の原理を学ぶことから始まった。長い歴史の中で体系づけられた東洋思想から発生した健康への考え方を、素問や養生訓などの文献を読み合いながら考えることで、各人が持っている自然観や死生観について、世代を越えた共通の思想が息づいていることを知ることができた。また、実際に植物に触れながら薬と健康について考えることで、体験を通じて学ぶことの楽しさや新鮮な驚きを感じることができた。健康という人類にとって普遍的で、かつ誰もが自身のこととして考え得るテーマを取り扱うことは、例え経験のバトンタッチが社会人から学生へというものであったとしても、それをどのように理解し自分のものにするかは各人に任されており、そこから生まれる気づきや新たな発想のバトンタッチは双方向に行われるという自然な学びの循環を生むきっかけになると考えられる。

第7回終了時に参加者13名（学生7名、社会人4名、教員2名）に対して行った自由記述式アンケートからは以下の回答が得られた。（第4表）

第3表：各回のテーマ及び参加人数

回	実施日	テーマ	学生（人）	社会人（人）	教員（人）
1	10/6	生命を考える【陰陽五行説】	11	5	2
2	10/20	健康って？【素問・養生訓】	8	4	2
3	11/10	自分の証を知る【補と瀉】	9	3	2
4	11/30	徳島大学薬用植物園見学	7	2	2
5	12/1	薬と健康【西洋薬・漢方薬】	2	5	2
6	12/8	食と健康【食材と食事環境】	7	5	2
7	12/19	薬食の伝統【身近な薬食】	8	4	3
8	1/12	身体と心の手当て	6	4	2
9	1/19	健康リスクを知る	5	4	2
10	1/28	まとめ	7	4	2

第4表：参加者の声

参加者	参加者の声
社会人	・皆さんの健康への関心の高さに感銘を受けました。 ・年齢差を超えた意見交換ができることはとてもいい刺激になります。 ・みなさんの前で自分の経験を語ることで、改めて伝えることの難しさを学びました。 ・世代を越えて伝えられたものにはどういった意味があるのか、もう一度

	みんなで考えてみたい。 ・一緒に文献を読み合うことで、また新しい視野が開けた。
学生	・好奇心が刺激された。 ・視野が広がった。 ・東洋思想の考え方が印象深く、新しい視点を持てた。 ・毎回参加者と意見交換ができて良かった。 ・自然と私たちの健康とのあり方について考えさせられた。 ・将来自分の仕事をイメージしながら考えることができた。 ・本当の健康とは何かについて改めて考えさせられた。 ・植物についてもっと知りたいと思った。
教員	・健康である今こそ、本当の健康とは？を考えてみることが大切だと実感した。 ・東洋思想が東洋人である我々の中にも息づいていることを再認識した。 ・お二人の健康に対する理論と実践をうかがって、人としての幸せについて学生と議論できたことが非常に意義深かった。

この学習会に参加した学生は、ほとんどが女子学生であった。そのために、毎回のテーマの中に出産や性についての話題が織りこまれることが多く、学生の漠然とした不安や悩みが打ち明けられることもあった。このような場面において、社会人の的確なアドバイスや励ましなどが行われたことで、学生同士でも問題の共有が図られ、自分の体や将来の健康について改めて考えるきっかけになったようである。今回参加されていた社会人は人の健康について考察を深められてきた方々であり、今回の学習会では、健康についてのひとつひとつの事例を挙げるのではなく、そこから社会人自身が感じたこと、得たことなどが見事に理論化されていた。このような理論体系の中で、個別の「健康」に関するテーマの位置付けが、意見交換することによって明らかになっていくために、参加者全員が新しい視野も獲得できるような方向性を持った学習会として成立したことが、アンケートからもうかがえる。

第５写真：鍼について説明する社会人

第６写真：薬草園見学

第7写真：『ツボ』について質問する学生

第8写真：身近な薬食作りの体験

5. おわりに

現在、学びのコミュニティで実施されている活動について、参加者の声とともに紹介した。その他にも現在企画中の学習会もあり、内容、告知等は本取組のホームページ（http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/）や毎週水曜日発行の『週刊学びのコミュニティーニュース』で発信している。これらの学習会の基本にある理念は「人からの学び」である。「人は人から学ぶ」という、最も基本的で自然な学びが、自主学習会の中で生まれていることがうかがえる。そして興味深いのは、三者の学び合いによって、より影響を受けているのは教員や社会人側であるように思われることだ。この自主学習会に参加した教員は、「大学が社会と関わる意義を地域の人と一緒に考える重要性に気付いた」という。今回の自主学習会に参加したある社会人は、「学生の発言を聞いて、これまでの人生を振り返って、改めて自身の取り組む課題が見えた」と、この取組に参加したことの意義を強調された。また企画の段階から自主学習会に携わった別の社会人は、「もう一度自分ができる社会貢献を考え、行動する気力が湧いた」と発言されていた。

柔軟性と変化の時代といわれる21世紀にあって、真の意味でのユニバーサルな学びが求められている[4)]。年齢や性別や民族、その他様々なボーダーを無理なく越える、まさに万能のパスポートとしての学びである。本取組で実施している授業や活動には、様々な世代や個性を持った人々の存在が何より必要である。そこで行われる交流そのものがユニバーサルであるし、そこで生まれたユニバーサルな議論が、やがて総合的な「知」となって新たな学びを生み出していく。この体験こそが、学びの本質であり、生涯にわたって学びを継続していく喜びの源であるといえるだろう。

注記・引用文献

1)『平成20年度徳島大学大学開放実践センター年報』2010、p. 89)

2)大橋眞、中恵真理子、光永雅子、Steve T. FUKUDA、斎藤隆仁、菊池淳、香川順子、廣渡修一「大学教育改革と教養教育－地域社会人活用による知の循環型社会の構築に向けて－」『大学教育研究ジャーナル』第6号、2009、pp. 88-97

3)光永雅子、中恵真理子、斎藤隆仁、的場一将、大橋眞「自主的な学びを目指す「学びのコミュニティー」活動－学生・社会人・教員で創る生涯学習の形－」『大学教育研究ジャーナル』第7号、2010、pp. 102-109

4)大学審議会「グローバル化に求められる高等教育の在り方について（答申）」2000